

天声人語

15歳の女子中学生が監禁先から逃げ出して救いを求めた公衆電話は、東京のJR東中野駅の構内にあった。「SOS110 119そのままダイヤルして下さい」と表示がある▼「ブカブカの服にサンダルばきの少女はここから自宅に電話をし、警察に通報した。居合わせた会社員によると、駆けつけた署員が名を確かめたとき、少女は受話器を握りしめたままうなずいたという▼もしここに公衆電話がなかったら――。想像しただけで背筋を何かが走る。電話探しに手間取れば、戻った容疑者に見つかったかもしれない。監視は強まり、事件は長引いただろう。きのう試みに周辺を四方八方歩いてみたが、大人でも公衆電話はなかなか見つけられなかった▼かつては全国に93万台もあった。1984年度を境に減り続け、いまや20万台を切った。東日本大震災では、窮地にもろい携帯電話との違いを実感したが、その後も撤去は続いた▼怪奇小説で知られた夢野久作の短編「鉄鎚かねづち」に「電話の神様」が出てくる。受話器から届く声や音の奥を鋭く察する10代の少年のことだ。株価の先行きから男女の機微まで耳で読み、運命をつかむ。昭和初めの作品だが、なるほど昔もいまも電話には人生を変える不思議な力が備わっている▼少女は機を逃さず、公衆電話へ走り、硬貨を入れ、自宅の番号を正しく押した。2年という闇の長さ
を思えば、その沈着さは一条の光のよ
ろに映る。「電話の神様」も感心して
空から見守ってくれたにちがいない。

2016・4・1